

第5回 一宮川流域における令和5年台風第13号による災害検証会議 議事概要

- 1 日時 令和6年10月29日（火）14：00～15：45
- 2 場所 千葉県庁中庁舎10階大会議室
- 3 出席 加藤座長、二瓶委員、服部委員

4 委員からの意見

(1) 今後の浸水対策のあり方

- ・ 事務局から資料1「今後の浸水対策のあり方（方向性）」を説明。
- ・ 一宮川流域における今後の浸水対策のあり方について、委員から以下の意見があった。
 - ▶ 現在の河川整備は、上下流に渡って河川水位を低下させる対策となっており、上下流バランスが取れたものとなっている。更なる大規模河川整備を追加するよりも、引き続き現在の河川整備をしっかりと進める必要がある。
 - ▶ ただし、残余リスクの対応として、内水対策や避難対策など流域対策や、令和5年降雨で外水氾濫による床上浸水があった鶴枝川では、河川整備で何らかの手立てが必要。
 - ▶ 今回は実現象を捉えてシミュレーションモデルを作成し、令和元年、5年など降り方の異なる雨で検討しており、良くできたモデルと言える。異なる雨の降り方において氾濫の表現でも違いが確認出来る。
 - ▶ 色々な降雨のケーススタディには、計画超過降雨だけでなく、比較的頻度の高い雨も含めて検討すると、地先の取組の効果が見えてくる。
 - ▶ 貯留対策は、河川のピーク水位の低減だけでなく、避難時間を稼ぐ意味もある。
 - ▶ 流域は運命共同体であり、今回のシミュレーションにより、持ちつ持たれつが見える化された。流域治水は、リスクと努力をシェアすること。河川管理者だけが対策するだけでなく、市町村や地域社会、住民が主体的に取り組むことが重要である。主体的な取組に繋がるよう、今回検証で分かった内容をわかりやすく説明できるようにすることも重要。
 - ▶ これまでの啓発だけではなく、流域治水文化を醸成して行くような広がりを目指すべき。一宮川流域には古くから地形的要件やたびたびの水害などで流域という理解がしやすい素地があると思う。全国の流域治水のトップランナーとして進めてほしい。
- ・ 上記議論を経て「今後の浸水対策のあり方」をとりまとめ、この「とりまとめ要旨」を公表することを合意。

(2) その他

- ・ 後日、検証会議の報告書を作成し公表する。
- ・ 流域治水協議会に対して災害検証会議における「浸水対策のあり方」を共有する。

以上